

# 生徒の自尊感情をいかに高めるか

## －生徒の自己実現を目指して－

県立上牧高等学校 教諭 谷川 喜一郎

Tanigawa Kiichirou

### 要 旨

前任校での部落解放研究部（以下、解放研という）の活動やボランティア活動を通して、不登校傾向の生徒や人間関係がうまくつくれない生徒が、自己を変えていく姿を目の当たりにしてきた。本校においても、障害児理解推進校指定や交流などを通して、同様な生徒や新たに自己変革を見せる生徒もでてきた。これらの活動が生徒の自己変革や自己実現に影響し、そこには自尊感情というものが大きく関与しているのではないかと考え研究した。

キーワード： つながる、心の豊かさ、認められる、自分の居場所、自尊感情

### 1 はじめに

本校には、様々な家庭の状況（要保護、準要保護家庭、ひとり親家庭など）や背景をもつ生徒が少なくない。赴任した当時、目に付いたのは、「どうせ俺（私）なんか」と自分を「見切る」生徒たちだった。自分への自信や将来に展望をもてない無気力な生徒たちであったり、人間関係をうまくつくれなかったり、不登校傾向の生徒たちであった。このため、生徒の自己実現は本校にとって取り組むべき大きな課題であった。

本校では、このような課題の解決に向けて学校全体として様々な取組を続けてきた。本研究では、特に自己実現を図るために、ボランティア活動や交流活動等を通して、自分というものを見付けだし、自信につなげる取組についての成果と課題をまとめ、考察を加えた。

### 2 研究目的

生徒の自己実現を目指すべく、ボランティア活動や交流活動等を通して、生徒自身の自尊感情を高める方途を探る。

### 3 研究方法

- (1) 前任校における実践とその考察
- (2) 本校におけるこれまでの取組とその分析
- (3) 本年度の取組とその分析

### 4 研究内容

- (1) 前任校における実践とその考察
  - ア 前任校での実践について  
前任校での解放研の活動について、その概要を次に紹介する。

(ア) 解放研をフリースペースに

当時、解放研には被差別の立場の生徒を含め、何らかの「しんどさ」を抱えた生徒が集まってきていた。そんなある日、解放研の生徒が友達を連れてきた。その生徒はA子といい、やや不登校傾向であった。しかも、登校しても教室に入るのは授業の時だけで、それ以外は保健室で過ごしていた。本当に解放研に溶け込めるのか心配だった。彼女から「また来てもいいですか」と問いかげられ、「…、うん、もちろんいいに決まってるじゃないか」と答えた。

その後、A子は解放研に徐々に顔を出すようになり、話の輪の中にA子の姿が見受けられるようになった。更に、驚いたことに、今までいくら言っても入れなかった教室に、授業以外でも入っていけるようになったのだ。この時ほど解放研の生徒たちのパワーに驚かされたことはなかった。「自分も同じ経験をしたから」と事も無げに言っただけの解放研の生徒に頭が下がる思いだった。彼らの言った「解放研をもっとオープンにしようよ」という言葉が更に印象的だった。

(イ) 夕食ボランティアの活動から

前任校のすぐ近くにある「たんぽぽの家」(社会福祉施設)の要請で夕食ボランティアが始まった。その後、「たんぽぽの家」内に「障がい」をもつ十数名の人たちが生活する「コットンハウス」もでき、夕食を作るスタッフが必要となった。その施設から火曜から金曜までの毎日、ボランティアをお願いしたいとの要望があった。私は全校生徒に向け、この夕食ボランティアのスタッフを募集するとともに、解放研の生徒を核に据えながら、ボランティア活動を進めていった。

私はいつもどおり、「たんぽぽの家」に向かうために校門を駆け抜けようとした。すると、後ろから「先生！どこに行くの？」という声があった。それがB子だった。急いでいるので簡単に夕食ボランティアの話をし、その場を去ろうとすると、彼女は「私も参加してもいい？」と聞いてきた。「ああ」と答えながらその場を離れた。彼女は不登校傾向の生徒であり、私の担当している授業も休みがちであった。そのような生徒がボランティア活動に参加などできることは、到底その時の私には思えなかった。

次の日、解放研の部屋にB子が飛び込んできて「今日、ボランティアに参加してもいい？」と訴えてきた。その時、そこにいた解放研の生徒が「ありがとう。ちょうど人数が足りなくて困っていたところなの。」と助け船を出した。内心ではさっきまで『今日は人数が多くてどうしよう』と言っていたくせにとあきれ一方、B子が変わり始めたことに驚きながらも気持ちよく思えた。その日は、解放研の生徒が中心となりB子をサポートしながら夕食を順調に作り上げ、その後、食事の介護までした。B子の一生懸命な姿はさすがしく、ここまでできるのかと感心させられた。

翌日、解放研の生徒と話をする機会があった。この生徒たちもB子の「しんどい」部分を肌で感じ取っていたのだ。そして、解放研やボランティアのメンバーがB子を支えていき、B子もそれに応えるかのように徐々に変わっていった。B子も「次、私はいつ行けるの」と催促するまでになり、最後には友達を口説いて数名のメンバーを連れてくるまでになった。更に驚いたことには、ボランティア参加の後、B子の欠席がほとんど無くなっていたのである。

夕食ボランティアについて彼女に尋ねると、「何か、自分という存在が認められたような気がして」「自分も人の役に立てるんだ」という答えが返ってきた。このことは解放研の生徒らの支えに負うところもあるが、ボランティア活動によって、自分自身に自信をもち、自分というものを取り戻す結果となった。

イ 課題と考察

各校でも同様であろうと思うが、人間関係をうまくつukれない生徒、あるいは不登校傾向にあ

る生徒は程度に差はあれ、存在する。前任校では、生徒がスクールカウンセラーからカウンセリングを受けたり、教職員がスクールカウンセラーを含めての校内研修を行ったりしていたが、なかなか思うに任せない状況にあった。実際に教室にほとんど入れないまま卒業していったケースもあった。

前項で記したA子やB子は、解放研やボランティア活動の中で、他と「つながり」、自分の存在を「認められる」ことによって、「自分の居場所」を見いだしていったのではないかと考える。そして結果として、彼女らはよりよい人間関係をつくりながら、自分に対する自信や自分自身を取り戻すことができるようになった。

解放研活動やボランティア活動が、これらの生徒の「自分の居場所」と成り得たが、もちろん、どのような生徒においてもこのような結果になるとは限らない。しかし、生徒の自尊感情を高める方途としては一考に値するのではないだろうか。

## (2) 本校におけるこれまでの取組とその分析

本校は、県の「障害児理解推進校」（平成11～13年度）の指定を受け、県立高等養護学校との交流活動やボランティア活動などに取り組んだ。

### ア 県立高等養護学校との「交流」から

県立高等養護学校との「交流」は、互いの文化祭に参加していくことから始めることになった。

本校の文化祭には、高等養護学校の3年生全員が参加することになり、本校の生徒会役員、解放研部員及びクラスなどから募ったメンバーなどが各グループを案内することになった。案内する生徒が集ってきた時、一瞬息を呑んだ。いわゆる、「まじめそうな」生徒もいるのだが、一方ではちょっと「やんちゃっぽい」男子生徒やちょっと「派手めな」女子生徒が目についたからである。うまくいくのだろうかと不安が募った。各グループにそれぞれ案内役を付けて送り出し、生徒会、解放研の生徒にもフォローを頼んだのだが、帰ってくるまで心配であった。やがて1グループずつ帰って来たが、そのたびに私の不安はどんどん打ち消されていった。それぞれが和気あいあいと帰って来たのだ。そして、心配だった男子生徒はというとまったくの“友だち”関係をつくっていた。例えば、高等養護学校の生徒にこづかれながら、「堪忍、堪忍」と冗談を返したり、女子生徒たちも同じ目線に立ちながら、うまくコミュニケーションをとっていた。それは、彼らが日ごろ見せたことのない姿であった。そして、彼らの姿は生き生きとし、すがすがしいものさえ感じさせられた。「来年もやるんだろ。案内やらせてや。」という生徒に、「頼むわ。ありがとうな。」と言いながら、彼らの本当の姿や心が見えていなかった私は、反省することしきりだった。



図1 交流風景

### イ 郁慈会（老人養護施設）での介護体験活動から

本校では、学期に1回（7月、12月、3月）、1年生全員が参加したり、生徒会役員を中心に参加生徒を募ったりして、家庭クラブとともに郁慈会を訪問する活動を行っている。更に、吹奏楽部や空手道部も加わることもある。

郁慈会では車椅子を押しながら庭を散歩したり、ゲームやリハビリ体操を行ったり、話相手になるなどの活動を行った。そこには、高齢者に寄り添い、一生懸命がんばる生徒の姿があった。

生徒たちは、郁慈会から帰るバスの中で「また来たい」「クリスマスには来よう」という元気な声を交わしていた。同様に、解放研の生徒たちも高齢者との「交流」を「心の豊かさ」をはぐ

む活動として、大切にしていこうと考え始めたようだ。更に、彼らの存在を認めた上で、様々な話をし、彼らの話に一生懸命耳を傾ける高齢者との「ふれあい」の中で、生徒たちは、自分の存在感に気付き、自分を見つめていくようになっていったのである。



図2 介護風景

#### ウ わたぼうしコンサートから

「障がい」者の活動や生活をじかに見聞きすることにより、「障がい」者問題をより正しく認識し、理解を深める機会として、「たんぼぼの家」の人たちによる“わたぼうしコンサート”（於：ペガサスホール）を実施した。

メンバーの中に同じ高校生が参加していることもあって、生徒は真剣に耳を澄ませて聴いていた。コンサート後、この高校生の一人は不登校傾向にある生徒と聞いて、驚かされた。コンサート中の姿からはまったく想像ができない話であったが、そのひたむきさを考えると、何か「本当の自分」、あるいは「自分の居場所」を求めているのではないかと思えてならない。

#### エ 分析

本校では、「障がい」児（者）や他世代との「出会い」や、「つながり」を大切にしてきた。生徒たちも、これらの活動を通して、しっかり自分を見据え、「つながる」ことの重要性をそれぞれの形で認識してきたと考える。更に、その中で生徒自身、「認められている」ことに気付き、「自分」というものを改めて認識するようになっていったのである。このことはきわめて重要である。また、本校生もいつかは卒業し、社会に出て、それぞれの地域社会で生活するようになる。そのような中で、「障がい」児（者）や高齢者と出会った時に、彼らがいかに行動できるか、あるいは互いの人権が尊重された「つながり」をもてるかが大事であり、このことを考慮に入れながら、人権尊重に対する実践力をもった生徒を育てる取組を進めてきたが、まだまだ課題は多くあると考えている。

#### (3) 本年度の取組とその分析

##### ア 保育体験学習

本年度、県立高校の再編により上牧高等学校としての最終年度となった。そのため、生徒にいろいろな経験や体験をさせようと、「愛・地球博」の見学、「アイダ」の演劇鑑賞などともにボランティア活動や体験活動を積極的に行った。

本校では、以前、家庭科の学習の一環として、1学年全員がクラスごとに分かれて、近くの上牧幼稚園を訪問して、保育体験をしていた。また、保育体験とは別に、文化祭などで本校に園児を招き交流を深めて、クリスマスの時にも、生徒会を中心に参加生徒を募って訪問してきた経緯がある。

この活動も他世代との交流であり、「心の豊かさ」をはぐくむ活動の一つでもある。園児とのふれあいは、幼い子どもを「いとおしむ心」をはぐくみ、生徒自らも成長させていくのである。そこで、本年度は3年生のみの学年であるが、保育体験の経験がなかったため、実施することになった。

保育体験は、2日にわたって行われた。2クラスが小さなグループに分かれて幼稚園のそれぞれの組に入り、園児らと遊戯をしたり、遊んだり、話をしたりした。その活動の中で生徒たちは、「園児とどのように接すればよいか」「園児の安全確保」「園児の行動の特徴」等のことを、各自が自分なりに考えた。その中で、「園児と遊ぶ」のではなく、幼稚園の「教育活動に参加させてもらっている」との認識が高まっていった。そして、自ずと自分たちの責任の重さに気付いていくことになった。



図3 保育風景

生徒たちは、「お姉ちゃん」「お兄ちゃん」と頼られたり、慕われたりすると、校内で見せる顔とはまったく違う大人びた顔を見せる。追い回されてたたかれたり、いっせいに飛びつかれたりして大変である。また一方では、一生懸命園児の視線に合わせて話をしたり、聞いたりしている生徒もいる。あつという間の2時間だったが、帰るときには一生懸命手を振る姿や心地よさそうな疲労感が漂う生徒の表情などはとても印象的であり、「先生、また来ようよ」という言葉も心に残るものがあった。

活動後のアンケートでは、9割以上の生徒が園児との交流をよくできたと答え、園児との交流がうれしかった、楽しかったと答えている。アンケートの後半には記述回答のものが多かったが、多くの生徒が真剣に答えてくれた。最後の「幼稚園児との交流を通して、自分自身が変わったと思えるところがあれば、書いてください」という質問には、一部ではあるが次のような記述があった。

- ・子どものことが好きになった。
- ・(自分が) 元気になった。
- ・同じ視線で会話することにより、新しい世界が見えてきた。
- ・(自分自身が) 優しくなった。
- ・目を見て話さなくてはいけないと思った。



図4 保育風景

## イ 取組の分析

介護体験活動と同様に、交流という「ふれあい」の中で、自分の存在について再認識し、自分を見つめていくようになった。生徒は「つながり」「認められ」「心の豊かさ」を広げることにより、徐々にではあるが、自らの自尊感情を高めていっているように思える。この活動を通して、無気力で将来に展望のもてなかった生徒が、実際に変わり始め、自己実現を目指すようになっている。

## 5 研究結果と考察

生徒たちは解放研活動やボランティア活動等の中で、「つながる」ということを大切にしつつ、そこでの思いを「つなげる」ことを実践した。私自身もこのことを深く受け止め、生徒とともに、この「つながり」をいかに広げていくかを考えてきた。

更に、かつてB子が語った「何か、自分という存在が認められたような気がして」「自分も人の役に立てるんだ」という言葉と、県立高等養護学校との「交流」の中で見せた生徒の姿などが私には重なって見えてくるのである。つまり、ボランティア活動等は、誰かのために何かをするということだけでなく、自分自身の存在に気付き、自分を見付けるといった営みの一面ももつのではないだろうか。

そして、保育体験活動の中で、不登校傾向の生徒が自分に自信をもち、その傾向が減少していった例もある。本年度の様々な活動において生徒も成長し、生徒たちの自尊感情を大いに高めることができたのではないだろうか。

「つながる」「自分の居場所」等からはじまり、交流やボランティア活動、保育体験活動等の中で生徒の自尊感情について考察を行い、研究を続けてきた。そして、ボランティア活動や、保育体験等の活動の中には、つながったり、自分が認められたり、自分の居場所を見付けたり、更に心の豊かさにつながるなど、自尊感情を高める要素が多くあることが分かった。また、自分が認められ、自己実現の糸口が見付かれば、単に自尊感情の高まりにとどまらず、不登校傾向の生徒に対しても効果がある。仮にそうならないにしても、社会に出てからの「生きる力」と成り得るのである。

以上のことから、これらの活動は生徒の自尊感情を高めることに効果的であり、生徒が自己実現を目指すには有効な方途である。また、その応用の幅も広いと考える。

## 6 おわりに

赴任した当時、耳にした、「どうせ俺（私）なんか」という言葉は最近あまり耳にしなくなったが、生徒たちを見ていると不安は多い。生徒の自尊感情を高め、自己実現につなげることが、生徒にとって、本当の意味での「生きる力」を付けることになると考えている。今後も「生きる力」とともに、自尊感情と向き合いながら研究を続けていきたい。